

Title	『瓊玉和歌集』の諸本について
Sub Title	The extant texts of the Keigyoku-wakashu
Author	中川, 博夫(Nakagawa, Hiroo)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2011
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.101, No.1 (2011. 12) ,p.146- 172
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	川村晃生教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01010001-0146">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01010001-0146</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 『瓊玉和歌集』の諸本について

中川 博夫

はじめに

後嵯峨院の第三皇子にして鎌倉幕府第六代將軍となつた宗尊親王の家集の内、その前半生の將軍在位時、在關東時の詠作を納める『瓊玉和歌集』の諸伝本について、各伝本の特徴と伝本間の異同とその關係性等を考察して、伝本の類別を試みながら、抛るべき本文を提示してみたい。

## 一 諸本の書誌

『瓊玉和歌集』（以下『瓊玉集』とする）の管見の及んだ現存伝本は、次のとおりである。各々の書誌を記す。各本初行下の漢字はその略号。各末尾に、書陵部本（五〇一・七三六）を底本とする私家集大成ならびに新編国歌大観の番号（算用数字で表記）に従つて（以下本稿で用いる歌番号は同様）、本文の有無と配列の異同の要点を記しておく。「欠」は

一首全体が、「歌欠」「詞欠」はそれぞれ和歌、詞書が無いことを示す。

①宮内庁書陵部本（五五三・一八）

書

〔室町後期〕写。綴葉装、一帖。藍色地金色雲形文緞子表紙、縦一六・〇×横一六・二糎。見返、斐紙に銀切箔散らし。外題ナシ。内題（扉題）、「瓊玉和詞集」。本文料紙、楮紙（打紙）。墨付、五四丁（一折目一三、二折目二〇、三折目一二、四折目九）。遊紙、前一葉。每半葉、一二〜一五行内外、和歌一首二行書。字面高さ（和歌一首目）、約一三・八糎。集付ナシ。五四丁表に「正和三年四月十日令書写之訖／故中務卿親王宗廟御詠／藤民部卿為明（花押）」の奥書があるが、これは偽奥書か（後述）。

54 歌・55 詞欠。104 欠。349 歌〜358 上句欠と377〜387 上句欠（二五〜二七行分、二丁分の落丁）。433 欠。494 欠。  
335が369と370の間に詞書「春恋を」で位置。392・393が逆順。

②国立公文書館内閣文庫本（二〇一・五〇六）

内

寛文三年九月二十四日写。袋綴、一冊。水色表紙、縦二七・八×横二〇・四糎。見返、本文共紙（芯に反故あり）。外題、表紙左肩に「瓊玉集全」と打付墨書。内題（端作）、「瓊玉和詞集卷一（〜十）」。本文料紙、楮紙薄様。墨付、五〇丁。每半葉、一〇行、和歌一首一行書。字面高さ、和歌一首目（除集付）、約二二・一糎。集付アリ。一丁表右下に、「尚圍□」（判読不能）朱印、一丁裏右下から上にかけて、「和学講談所」「浅草文庫」「書籍館印」の各朱印あり。五〇丁裏に「此一冊古筆不慮一覽之則一日借留倉卒／令書写則遂校合者也／寛文三年九月廿四日 良世（花押）」の書写奥書あり。

34 歌・35 詞欠。120 欠。371 歌・372 詞欠。396 歌・397 詞欠。

335 が 369 と 370 の間に詞書「春恋を」で位置。392 と 393 が逆順。

378 は行間細字補入。

③国立歴史民俗博物館蔵高松宮家伝来禁裏本（H・六〇〇・五七一／る函二九五）

|| 高

〔江戸前期〕写。袋綴、一冊。灰青色横刷毛目表紙、縦二七・一×横二〇・〇糎。見返、本文共紙。外題、左肩題簽（二五・一×三・六）に「瓊玉和歌集」と墨書。内題（端作）、「瓊玉和歌集卷第一（一〇）」。本文料紙、楮紙（打紙）。墨付七六丁、遊紙、前後各一葉。每半葉、一〇行、和歌一首二行書。字面高さ、和歌一首目一行目（除集付）、約二〇・〇糎。集付アリ。最終丁裏左に、「于時永享八<sup>辰</sup>年六月日」の識語あり。その下に、「幸仁」の方形朱印（二・六×二・六糎）。後見返右下に「明暦」（後西天皇）の長方形朱印（五・〇×三・四）。高松宮（有栖川宮）第二代良仁親王（後西天皇）から、その皇子の第三代幸仁親王に伝来。後西天皇は、寛永十四年（一六三七）〜貞享二年（一六八五）二月二十二日、四十九歳。幸仁は、明暦二年（一六五六）三月十五日〜元禄十二年（一六九九）七月二十五日、四十四歳。

34 歌・35 詞欠。120 欠。371 歌・372 詞欠。396 歌・397 詞欠。

335 が 369 と 370 の間に詞書「春恋を」で位置。201 と 202 が逆順。208 と 209 が逆順。350 と 351 が逆順。392 と 393 が逆順。

④宮内庁書陵部本（五〇一・七三六）

|| 底

〔江戸前期〕写。袋綴、一冊。白茶色地藍色雲竜刷文表紙、縦二八・三×横二〇・六糎。見返、楮素紙。外題、左肩題簽

(朱色地刷文様、一六・〇×三・四)に「瓊玉集」と墨書。内題(端作)、「瓊玉和謔集卷一(十)」。本文料紙、楮紙(打紙)。墨付、五〇丁。遊紙、前後各一葉。每半葉、一〇行、和歌一首一行書。字面高さ(和歌一首目、除集付)、約二・三糎。濃縹色の不審紙(ちぎり紙片)及び縹色方形小紙片貼付散見。集付アリ。

五〇八首完存。

⑤慶応義塾大学図書館本(二四一・一二三・二/準貴)

||慶

〔江戸後期〕写。袋綴、一冊。白色無地表紙、縦二二・〇×横一四・八糎。見返、本文共紙に、本文と別筆で「此ひとは、子をしへ子石井をし/もとめ得しとて恵みたげければ/岸本の朝田すぎ来し水ぐきを/いしぬにくめるえにはふかしな/のちの印に書けるは 呉升舎直子」とあり。本文料紙、楮紙。墨付四〇丁。每半葉一〜二行内外、和歌一首一行書。字面高さ、和歌一首目(除集付)、約一七・八糎。集付アリ。一丁表右下に、「岸本家藏書」その上に「朝田家藏書」その右横に「刀水書屋」、右上に「日尾瑜印」の各朱印、四〇丁裏左下にも「快馬/渡刀/水」(「渡」の三水は「水」と兼ねる)の陰刻朱印あり。一丁表に付箋して、ペン書きで「朝田家藏書/岸本家藏書」岸本由豆流也/日尾瑜印 日尾荆山也/呉升舎直子 日尾荆山之女也」とあり(渡辺刀水筆か)。

五〇八首完存。

⑥篠山市青山会本(二五九)

||青

〔江戸中期〕写。袋綴、一冊。白茶色表紙(極薄い横刷毛目あり)、縦二八・一×横二〇・三糎。見返、本文共紙。外題、

左肩濃肌色題簽（一六・一×三・三糎）に「瓊玉和歌集」と墨書。内題（端作）、「瓊玉和歌集卷第一（〜十）」。本文料紙、楮紙。墨付、五二丁。遊紙、前一葉。每半葉一〇行、和歌一首一行書。字面高さ、和歌一首目、約三三・〇糎。

86 歌・87 詞欠。270 欠。

⑦ソウル大学中央図書館本（三二二六・一八五）

|| 京

〔江戸初期〕写。袋綴、一冊。藍色表紙、縦二七・八×横二〇・〇糎。見返、本文共紙。外題、左肩に「瓊玉集 宗敬親王」と打付け墨書。内題（端作）、「瓊玉和歌集卷第一（〜十）」。本文料紙、楮紙薄様（打紙）。墨付、五二丁。遊紙、後一葉。每半葉一〇行、和歌一首一行書。字面高さ、和歌一首目、約二二・七糎。見返中央やや上に、「京城帝国大学図書館」の方形朱印（五・五×五・四）あり。一丁表中央上端部に、上記朱印の下部を割印。「一誠堂」のラベルを貼付した後詠えの帙を備える。五二丁表に、「此一冊者以 禁中御証本留／写畢／慶長三年三月日 主左少将基任／重而可加清書之」の奥書あり。これは、⑦⑩の諸本に小異を伴って共有（後述）。

86 歌・87 詞欠。270 欠。

⑧静嘉堂文庫本（八二・四四）

|| 静

〔江戸中期〕写 袋綴、一冊。白地雲英藻模様表紙、縦二四・二×横一七・二糎。見返、本文共紙。外題、左肩単梓題簽（一六・五×三・三糎）に「瓊玉和歌集」と墨書。内題（端作）、「瓊玉和歌集卷第一（〜十）」。本文料紙、楮紙（打紙）。墨付、四六丁。每半葉二一行、和歌一首一行書。字面高さ、和歌一首目、約一九・四糎。一丁表右下に、「藤原実富之印」

(五・六×一・六)、〔西南堂藏書〕(六・六×二・二)、右上に、「色川參中藏書」(三・〇×三・〇)の各朱印あり。四六丁表に⑦京本と同種の奥書あり。

32欠。86歌・87詞欠。175欠。270欠。

⑨島原図書館松平文庫本(二三六・二三)

|| 松

〔江戸中期〕写。袋綴、一冊。藍色地雷文繫蓮華唐草文表紙、縦二七・四×横二〇・一糎。見返、本文共紙。外題、左肩題籤(二四・五×三・二糎)に「瓊玉和哥集」と墨書。内題(端作)、「瓊玉和歌集卷第一(〜十)」。本文料紙、楮紙薄様(交漉か打紙か)。墨付、八三丁。遊紙、前後各一葉。每半葉一〇行、和歌一首二行書。字面高さ、和歌一首一行目、約一九・八糎。八三丁裏左下に、「尚舍源忠房」の子持梓緑印(四・〇×一・四糎)、「文庫」陰刻朱印(一・九×二・六糎)あり。八三丁表に⑦京本と同種の奥書あり。

86歌・87詞欠。270欠。

⑩上賀茂神社三手文庫本(今井似閑、歌/申二三四)

|| 三

〔江戸中期〕写。『大江千里集』と合写。袋綴、一冊。薄藍色地白抜水玉文表紙、縦二七・三×横一九・九糎。見返、素紙(やや厚手の楮紙)。外題、表紙中央に「大江千里集/瓊玉和哥集」宗尊親王家集」と打付墨書。内題、一丁表左肩に扉題「大江千里集」、端作「大江千里集」、二七丁表左肩に扉題「瓊玉和哥集」(本文料紙と異なり見返と同じ料紙)、端作「瓊玉和歌集卷第一(〜十)」。扉題は本文と別筆で料紙も異なるので、現装丁成立時に付すか。本文料紙、楮紙(打紙)。墨

付、七九丁（含扉）。千里集二六丁、瓊玉集五三丁）。遊紙、中（千里集と瓊玉集の間）一葉（本文料紙と異なり見返と同じ料紙）、後一葉。每半葉、千里集八行、和歌一首二行書、瓊玉集一〇行、和歌一首一行書。字面高さ、千里集一首目一行目、約一六・八糎、瓊玉集一首目、約二〇・八糎。二丁表左下から上に、「今井似閑」方形（三・二×三・二糎）朱印、「上賀茂奉納」瓢箪形（六・四×三・九糎）朱印、「賀茂三手文庫」長方形（七・六×一・四糎）陰刻朱印あり。朱墨・藍墨補筆あり。七九丁表に⑦京本と同種の奥書あり。

86歌・87詞欠。270欠。

⑪山口県立山口図書館本（九七。今井似閑本）

山

〔江戸中期〕写。袋綴、一冊。茶色無地表紙、縦二五・七×横一九・六糎、表紙やや右上に「辰九十六」と打付墨書。見返、素紙（本文料紙と異なる）。外題、左肩題簽（一六・六×四・〇糎）に「大江千里集／瓊玉和歌集」と墨書。内題、一丁表左に扉題「大江千里集／瓊玉和歌集」宗尊親王／家集（本文と同筆か）、端作「大江千里集」、同「瓊玉和歌集卷第一（十）」。本文料紙、楮紙。墨付、八九丁（含扉）。千里集二六丁、瓊玉集六三丁）。遊紙、前後各一葉。每半葉八行、千里集和歌一首二行書、瓊玉集和歌一首一行書。字面高さ、千里集一首目一行目、約一七・一糎、瓊玉集一首目一行目、約二〇・一糎。二丁表右上に、「明倫館印」方形（三・二×三・二糎）朱印、その左に「安政七改」子持梓長方形（三・三×一・七糎）朱印、その左に「明治十四年改」長方形（三・六×一・二糎）朱印。見返しと前遊紙との間に、「大江千里集／瓊玉和歌集 一冊」と墨書した短冊形紙片（一三・一×二・一糎）あり。朱補筆あり。八九丁表に⑦京本と同種の奥書あり。

86歌・87詞欠。270欠。

⑫神宮文庫本（和書三門／一一五二）

|| 神

〔江戸中期〕写。袋綴、一冊。茶色渋引（横刷毛目記録表紙）、縦二八・〇×横一八・九糎。見返、本文共紙。外題、左肩に「瓊玉和歌集<sup>全</sup>」と打付墨書。内題（端作）、「瓊玉和歌集卷第一（一〇）」。本文料紙、楮紙。墨付、四四丁。遊紙、前一葉。每半葉一一行、和歌一首一一行書。字面高さ、和歌一首目、約二二・〇糎。一丁表右下に「勤思堂」丸形（直径三・〇糎）朱印、その上に「林崎文庫」子持枰長方形（七・五×一・九糎）朱印、右上に「林崎文庫」方形（四・四×三・七糎）暗朱（葡萄茶色）印。

204が209の後（巻四巻軸）に位置。245と246が逆順。359が355と356の間に位置。

⑬群書類従本（国文学研究資料館蔵 ヤ〇・二七・一〜六六六）

|| 群

刊本（版本）。巻二百三十所収。

204が209の後（巻四巻軸）に位置。245と246が逆順。359が355と356の間に位置。

また、456の後（巻九巻軸）と巻十の端作との間に二字下げやや小字にて「うき身こそかはりはつとも世中の人の心の昔なりせば／続拾遺懐旧ニ入此集ニ不見」とある。これは、『続拾遺集』（雑下・一二四九）に「懐旧の心」の詞書の下に収められている宗尊の一首で、『中書王御詠』（雑・二九六）には「述懐」題の一群中に収められている歌である。

⑭ノートルダム清心女子大学黒川文庫本（H一五三・一一一／黒川本）

＝黒

黒川文庫の本文は、群書類従本の忠実な模写で、仮名遣いや漢字の訂正・行間や上欄に注された集付（部立・詞書を含む）・参考歌等については、黒川氏の校勘・考査の結果と見られる。従って、必要のない限り考査対象としては割愛し、必要に応じて言及することとする。

なお、以上の他に、⑮国立国会図書館本（二四四・二八）と⑯三康図書館本（五・一四八一）の存在が知られる。前者は、江戸中後期頃の書写と見られ、⑧静嘉堂文庫本と同じく色川三中の蔵書印を持ち、書形や書式や書風・字体等の外形から奥書・識語類と和歌・詞書の欠脱の様相や本文細部の特徴に至るまで静嘉堂文庫本に近似しつつ、静嘉堂文庫本に比してやや劣後する点もあるので、静嘉堂文庫本と直接の書承関係（親子関係）か、極めて近い関係にあることは間違いない。後者は、比較的新しいやや乱雑な書写にかかり、奥書・識語類と和歌・詞書の欠脱の様相から、後述するⅡ類の、それも⑥青山会本以下の諸本と同類の伝本であることは疑いない。もとより、両本についても精査の要があることは当然だが、小論の分類や結論を左右するような本文を有しているとは考えられず、拙稿『瓊玉和歌集』注釈稿（一～四）（『鶴見大学紀要』四五～四七、平二〇～二二・三、『鶴見日本文学』一四、平二二・三）に示した校異には含まれていないこともあり、本稿では、考査の対象から除外した。

## 二 本奥書と集の成立

諸本には共通して、次の本奥書と和歌一首があり、『瓊玉集』の成立を伝えている。今④の書陵部本（五〇一・七三六）

で示すと、次のとおり。

「文永元年十二月九日

奉 仰真観撰之

おひてかくもしほに玉そやつれぬる

浪は神代のわかのうちらかせ」

即ち、文永元年（一二二六）十二月九日に、宗尊親王の仰せを奉じて真観が撰したというのである。真観は、俗名藤原（葉室）光俊。弁入道とも。建仁三年（一二〇三）→建治二年（一二七六）六月九日、七十四歳。時に六十二歳。父権中納言光親、母藤原定経女、順徳院乳母従三位経子。右少弁・藏人。承久の乱で父に連座して筑紫配流、貞応元年（一二二二）帰洛。歌論『簸河上』は、宗尊に渡ることを意識してか、文応元年（一二六〇）五月半ば過ぎに、幕府近くで著述したものであり、その年十二月二十三日に真観は宗尊の許に初出仕を果たしている。その後、弘長二年（一二二二）九月に真観等が『統古今集』撰者に追認されたことには、真観の宗尊への教唆の噂があり、真観は否定しているが、少なくとも世上間には背景に宗尊の存在が影響したと捉えられていたようである。和歌を通じて両者の関係は、極めて親密であったと見てよく、真観からの家集撰進の働きかけが先行したかもしれないが、宗尊が真観にそれを託すほどには信頼していたことは確かではないだろうか。奥書付属の歌は、「年老いて私真観がこのように書く、搔く藻塩草の詠草、即ちこの撰集により、かえつて宗尊親王の玉の御歌がみすばらしくやつれてしまった。けれども、この集の御詠の歌風は、神代以来の和歌の浦の浪を吹き寄せる風のように、永久に変わらないものなのだ」といった趣意であろうか。

これに続く、「中務卿宗尊親王後藤院第一皇子/母 准后棟子」という識語は、恐らくは江戸時代以降の後人の付記であろう。①

書・⑫神・⑬群本がこれを欠く。①書本については、他本に比しては古写であり、識語が記される以前の時代の書写であることが窺われよう。⑫神本と⑬群本については、同識語を持たない祖本を共通にしていることによると考えられる。

### 三 諸本の書写奥書

さて、①の書陵部本（五五三・一八）は、近世期の書写がほとんどの現存諸本中で唯一、室町期の書写にかかるかと思われる古写本である。その書写奥書は、次のとおり。

「正和三年四月十日令書写之訖

故中務卿親王<sup>宗尊</sup>御詠（私注、「詠」は「哥」に重書）

藤民部卿為明（花押）」

ここに言う「為明」は、二条為世の孫で正二位中納言為藤の男、正二位権中納言に到る為明であろうか。為明は、永仁三年（一二九五）生まれであり、正和三年（二二三四）には二十歳である。その任民部卿は、貞治三年（一二三六）の四月十四日で、その年の十月二十七日に七十歳で没するのである。従って、右の書写奥書は、偽奥書である可能性が高い。確かに諸本中では比較的古写の伝本ではあるが、その本文は、書誌及び後掲の一覽表に示したように、落丁があり、それ以外にも幾つかの歌を逸している。かつ細かい本文の異同についても、例えば、「裁ち縫はぬ衣と見えて朝ばらけ水上霞む布引の滝」（巻一・春上・7）の歌末が書本のみが「松」となっている、あるいは「いひしらぬつらさそふらし雁がねの今はと帰る春の曙」（同上・35）の第四句が書本のみが「人はいとへる」となっている等々、他本に比して優良とは言えない本文をまま有していて、証本として信頼するに足るものではないと言わざるをえないのである。

また、③の高松宮旧蔵本の奥には「于時永享八<sup>辰</sup>年六月日」とある。永享八年丙辰（一四三六）は、室町時代後花園天皇代の年紀だが、同本は疑いなく近世の書写にかかり、これは書写や所持の本奥書ということになる。誰人の如何なる事情による書付けの痕跡かは全く分らないが、この年に遡る由緒を有する本文であることを疑うべき事由も今のところは見当たらない。

一方、⑦のソウル大学本（京城帝国大学旧蔵本）以下⑩の山口図書館本までの五本が有する書写奥書を、ソウル大学本によって掲げてみると、次に示すとおりである。この書写奥書の共有は、後掲の一覽表に見る本文の欠脱の共通と全く齟齬しない（但し⑧静本は、同じ書写奥書を有する他本に比して本文32と175を固有に誤脱）。

「此一冊者以 禁中御証本留  
写畢

慶長三年三月日

（一行分空白）

主左少将基任

重而可加清書也

「基任」とは、藏人頭左中将基継男で、参議従三位に至る藤原基任であろう。天正元年（一五七三）正月十一日生まれ、慶長十八年（一六一三）正月十四日に四十一歳で没している。天正十七年（一五八九）正月十一日に十七歳で左少将に任じ、慶長十三年（一六〇八）正月十二日、三十六歳で左中将に転じている。この間、右中将を経た可能性もあるうか。いずれにせよ、慶長三年（一五九八）年三月に宮中伝来の然るべき証本を以て書写した本を、二十六歳の左少将

基任が手に入れ、重ねて清書すべきであったとした本であろう。

同じ奥書を持つ他本について見ると、⑧静嘉堂本は、右とほぼ同様の書式で記されている。⑨松平文庫本は、「禁中」の上の一字分の空白はなく、「三月日」と「主左少将」の間の一行分の空白もない。⑩三手本と⑪山口図書館本は、同様に一字と一行の空白がない上に、「主左少将基任」から「主」が消えて、「三月日」の直下に一字程度の空白を置いて「左少将基任」とのみあるのである。⑦京本と⑧静本の形が本来で、⑨松本は字を詰めた書式で、「禁中」に対する敬意と「主基任」が「慶長三年三月日」の書写者ではないことを示す意図とが希薄になり、⑩三本と⑪山本は、あたかも「左少将基任」が書写者であるかのように変形していることになる。もとより、三本と山本の両本は共に今井似閑本であり、直接の書承関係にあるか、そうでなくとも極めて近い関係にあることは間違いないであろう。

なおまた、書写奥書では⑩三・⑪山本に比して妥当性を見せる⑦京・⑧静・⑨松本だが、これら三伝本は一方で、宗尊の歌の掉尾(508)から一首前の507歌「万代のかすにとらなむ君かすむ亀のお山の滝のしら玉」の後ろに各数行分の余白を取り丁表から丁裏にわざわざ替えて、宗尊歌掉尾の508歌「すへらききの山の小松ことしやちよのはしめなるらん」と、右掲真観の本奥書(含509真観歌)を続けて書写している。508詞書「文永元年大嘗会の心をよませ給けん」と本奥書の「文永元年十二月九日」(以上⑦京本で示す)を一連のものとして誤解したことの反映であろう。⑩三・⑪山本も同様に508を丁の表を裏に替えて記すが、奥書は連続させずに丁を替えている。

同種の書写奥書を持つ⑦京・⑧静・⑨松・⑩三・⑪山の五伝本には、当然に共通の祖本を想定しえようが、中では、⑦京・⑧静・⑨松の三伝本、⑩三・⑪山の両伝本に、より関係性が強いことが窺われよう。

#### 四 和歌・詞書の有無と配列順の異同による諸本の分類

①書本の落丁に起因する本文の脱落分は除き、諸本の和歌・詞書の有無と配列順の異同を一覧表に示すと、次頁のとおりになる。結論から言えば、これらの位相は、先に述べた書写奥書の共有の様相、諸伝本間の細かい字句の異同の様相とも大きく矛盾はしないので、これに従って、諸本を三区分に類別することとする。Ⅱ類本についてはさらに、歌数の一致と書写奥書の共有から、④底本と⑤慶本を第1種、⑥青本から⑩山本までの六本を第2種に細分しておく。

これらの和歌・詞書の有無は、ある歌とその歌の詞書が欠けたために出典と齟齬する前歌の詞書と次歌とが結び付いている錯誤の情況や、同じ詞書がかかる歌の配列で二首目以降を欠くという様相等に照らして、104、120、433、494を除くと、編纂過程に生じたのではなく、全て転写の過程の誤脱に起因すると疑いなく判断される。104、120、433、494の四首については、後述のようにⅠ類本が編纂のより早い段階の本文を伝えるとすれば、後に追加された可能性を完全には排除することができない。しかしながら、偽奥書を持つ①書本の書写の杜撰さや、②内本・③高本の他箇所のみらかな誤脱の存在に照らせば、やはりこれらも誤脱である可能性が高いと見るのが穏当であろうか。現段階では、本集の総歌数は、377の本歌の注記が本文化した378（後拾遺集・別・四七八・長能）を除いて、宗尊の和歌五〇七首と真観の和歌一首の計五〇八首で、誤脱を除いて所収歌に異なりはないと見るべきかと考える。その点では、現存本文は、複雑な編纂過程を想定させるものではない。なお、④底本と同じ歌数で配列も同じ伝本は、唯一⑤慶本のみである。両者の間に他に比して強い類似性を認めてよいであろう。

494	433	396 歌 397 詞	393 の 順	371 歌 372 詞	369 335 370 の 順	355 359 356 の 順	351 350 の 順	270	246 245 の 順	209 204 の 順	202 201 の 順	175	120	104	86 歌 87 詞	54 歌 55 詞	34 歌 35 詞	32	
×	×		○		○									×		×			書
		×	○	×	○								×				×		内
		×	○	×	○		○				○	×					×		高
																			底
																			慶
								×							×				青
								×							×				京
								×				×			×			×	静
								×							×				松
								×							×				三
								×							×				山
						○				○	○								神
						○				○	○								群

和歌・詞書有無及び配列順異同一覧（一首全体・和歌・詞書無しは×印で示す。配列順異同は該当する場合○印で示す）。

## 五 配列順の異同に窺う諸本の関係

右の一覧にも示すとおり、所収歌の配列には、複数の伝本間に共通して認められる異なりが存する。その配列の異同について、諸本間の異なりが編纂上の異なりに関わる可能性がある点を確認する意味もこめて、やや詳しく検討してみよう。掲出本文は、拙稿『瓊玉和歌集注釈稿（一〜四）』（鶴見大学紀要四五〜四七、平二〇〜二二三、鶴見日本文学一四、平二二・二三）に示した、④の書陵部本（五〇一・七三六）を底本にした整定本文による（特記しない限り同様）。卷七恋上に収める335は前の334から詞書「春恋」の二首連続で、次歌336の詞書「秋恋」と対照する配列である。

### 百番御歌合に、春恋

言はで思ふ心の色を人間はば折りてやみせん山吹の花 334

涙にて思ひは知りぬとどむともかたしや別れ春の曙 335

### 秋恋

つつめども涙ぞ落つる身に恋の余るや秋の夕べなるらん 336

ところが、①書・②内・③高の三本は、335が次巻恋下にあり、369と370の間に「春恋を」の詞書で、次のように配されている。

### 三百首御歌中に

暮れなばと契りてもなほ悲しきは定めなき世の暁の空 369

### 春恋を

涙にて思ひは知りぬとどむともかたしや別れ春の曙 335

逢後契恋

いかにせむ逢ふまでとこそ歎きしにその面影の添へて恋しき 370

369の結句「暁の空」と335の結句「春の曙」との類縁にかりうじて連接の意味合いが見出されようか。しかし、369の主題は370と共に「逢後契恋」と見てよいが、春曙に寄せた恋歌である335の主題は前後の369 370と明らかに異なるであろう。①書・②内・③高本と④底本以下の諸本との配列の異なりが、真観の編纂時の推敲の痕跡であるとするならば、やはり①書・②内・③高本の形が先行して、その後配列上の不合理を正すべく、334の詞書「百番御歌合に、春恋」の「春恋」題の下に335歌を配する、④底本以下の諸本の形に改められたと見るべきであろうか。この判断につけば、両者の間に編纂時の修整に起因した異同に基づいた本文の類別を想定することになろう。①書本以下の諸本を、④底本以下の諸本に比較すればやや先行するもの（原撰）として、第I類とする次第である。なお、④底本以下の諸本の形の場合、335歌には334歌の詞書「百番御歌合に、春恋」がかかるが、『柳葉集』にはその「百番御歌合」に該当する「文永元年六月十七日庚申に自らの歌を百番ひに合はせ侍るとて」（四五〇～五六二）の「春恋」題の下に、334歌のみしか見えない。しかし『柳葉集』には、当該「文永元年六月十七日庚申」百番自歌合」の二〇〇首の内の一一三首が所収されているに過ぎず、そこでは同一の題で複数の歌が連続している場合もままあるので、335歌も本来その「百番自歌合」の一首であった可能性は残ろう。ただしまた、「百番自歌合」の一首ではないものが、結句の「春の曙」の縁から「春恋」題の下に配された可能性も見えておく必要はあろうか。

また一方、338と339の詞書には伝本間で二大別される異なりがある。④底本と⑥青・⑦京・⑧静・⑨松・⑩三・⑪山の

諸本は、次のとおり。なお、338詞書を⑤慶本は行間小字補入で有しているの、④底本以下と同様の形と判断しておく。

恋の心を

袖を我いつの人間にしほれとて忍ぶに余る涙なるらむ 337

よそにては思ひありやと見えながら我のみ忍ぶ程のはかなさ 338

奉らせ給ひし百首に、不逢恋

逢ふ事はいつにならへる心とてひとり寝る夜の悲しかるらん 339

思ふにもよらぬ命のつれなさはなほながらへて恋ひや渡らん 340

さりともと月日の行くも頼まれず恋路の末の限り知らねば 341

この部分が、①書・②内・③高・⑫神・⑬群の諸本では、つぎのようにある（①書本で示す）。

恋心を

そでをわれいつの人まにしほれとてしのぶにあまるなみだなるらむ 337

たてまつらせ給ひし百首に

よそにてはおもひありやとみえながらわれのみしのぶほどのはかなさ 338

不逢恋

あふ事はいつにならへるこゝろとてひとりぬるよのかなしかるらん 339

おもふにもよらぬいのちのつれなさはなをながらへてこひやわたらん 340

さりともと月日のゆくもたのまれずこひちのすゑのかぎりしらねば 341

『柳葉和歌集』にも収める各歌の出典は、337が「弘長三年八月三代集詞百首」、338と341が「弘長二年冬弘長百首題百首」である。出典を「弘長二年冬弘長百首題百首」とする歌は、本集では「奉らせ給ひし百首に（＋歌題）」の類の形の詞書が付されているのが普通であるが、歌題が記されていない例も散見するので（166 188 284）、338の場合にも①書本以下の諸本のように、歌題が付されていないかたとしても不思議ではない。また、339と341歌は338歌と本来は同機会の百首歌の連続した歌群であり、その詞書「たてまつらせ給ひし百首に」を338歌に付して、それを承けながら339に「不逢恋」の歌題を付す意図であったと見れば、①書本以下の形でも矛盾はない。しかしながら、やはり①書本以下の形では、339と341が338とは別機会の歌だと誤解される（と編纂者が考えた）可能性が否定できないであろう。④底本以下の337と341の詞書の付され方でも、338の出典が明示されない恨みは残るものの、それは本集の他の箇所でもままた見られる現象でもあれば、④底本以下の形は①書本以下の形に比して、より合理的に整理された印象が拭えないことも確かである。本集の編纂過程が反映した配列の異なりかとも疑われるのであり、①書本以下の形が原撰で④底本以下の形が精撰である痕跡を、ここにも見ておきたいと思うのである。

なお、私家集大成と新編国歌大観で共に378の番号を付与されている、377の本歌である『後拾遺集』（別・四六七）の長能歌は、恐らくは何人かによる本歌を指摘する注記が本文化したものと見てよいであろう。I類本では、①書本が377と387上句を落丁により欠くのでその原状は不明であるが、②内本が「後拾 藤原長能」と注しつつ行間に三字下げの小字により補記しているのは、本来の姿を留めたものであろう。他の諸本は、この長能歌を他の宗尊歌と同じ書式で記している、②内本の形よりは後出の形を示している。その内、⑤慶本のみが「後拾 藤原長能」と注するのは、②内本の類の本文との関係の強さを窺わせるであらう。④底本は「後拾」の集付を記しつつも長能歌を他の宗尊歌と同じ書式で記

しているのです、この点では、むしろ劣後の本文である。

さて、⑫神本と⑬群本の近さを配列上に確認しておこう。巻四秋上204「袖の上にとすればかかる涙かなあな言ひ知らず秋の夕暮」が、⑫神本・⑬群本は、同上209「あはれ憂き秋の夕べのならひかな物思へとは誰教へけん」の後、秋上巻軸に位置している。194〜208は、結句に「秋の夕暮」を持つ歌の一群で、これは意識的な配列とらしく、撰者真観の最終的な意図は④底本以下の配列順にあったと見てよいであろう。この配列異同の先後は不明だが、⑫神本と⑬群本の親近は窺えよう。また、⑫神本・⑬群本は、巻五秋下245「百番御歌合に／里は荒れていとど深草茂き野にかれなで誰か衣打つらん」と246「五十首御歌合に／偽りの誰が秋風を身に染めて来ぬ夜あまたの衣打つらん」が逆順になっている。245・246の順と、246・245の順と、どちらの場合も前後の擣衣歌群の中で違和感はなく、この配列異同の先後も不明である。さらに、巻七恋上356から359までの、詞書「待恋の心を」の下の四首は、次のとおり。

待ち侘びて独りながむる夕暮はいかに露けき袖とかは知る 356

来ぬ人をいかに待てとか秋風の寒き夕べに月の出づらん 357

宵の間に頼めし人はつれなくて山の端高く月ぞなりぬる 358

寝ねがてに人待つ宵ぞ更けにける有明の月も出でやしぬらん 359

この356〜359の四首が、⑫神本・⑬群本は、359 356 357 358の順に配列されている。355「また人を待ちぞ侘びぬる偽りにこりぬ心は秋の夕暮」の結句「秋の夕暮」と356「夕暮」の繋がり、356夕暮・357月の出・358高き月・359有明の月の並び、の両面から見て、359に始まる⑫神本・⑬群本の配列に比して、底本以下の配列の方がより自然であろう。この配列の異同の先後も不明だが、やはり⑫神本と⑬群本の他本に比した関係の深さは明らかである。

以上、⑫神本・⑬群本の他本との配列の異同が、撰集の過程で生じたのか、転写の過程で生じたのかは不明とせざるをえないが、⑫神本と⑬群本を一つの類として他と区別することは認められるものと考ええる。

なお、巻八恋下の392「奉らせ給ひし百首に、同じ心（逢不会恋）を／沢田河井手なる蘆のかりそめに浅しや契り一夜ばかりは」と393「見るたびに辛さぞまさる今はとて人の急ぎし有明の月」が他本と逆順である②内本と③高本は、その点で親しい関係性を覗かせている。この配列の他本との先後を、内容上に推測することは不可能であるが、諸本全体の関係性に照らせば、独自の錯誤と見るべきであろうか。③高本のみが巻四秋上の201「いつまでかさても命の長らへて憂しとも言はむ秋の夕暮」と202「尋ねばや世の憂き事や聞こえぬと岩ほの中の秋の夕暮」が他本と逆順であることも、同断であろう。

## 六 異本注記と細かい異同及び集付等に窺う諸本の関係

ここで、諸伝本の本文に注記された異本本文の様相に窺いうる点を確認しておきたい。

まず、④底本には、多数ではないが本文の右傍に異文が注記されている。292「橋立や与謝の浦わの浜千鳥鳴きてと渡る暮のさびしさ」の「浦わの」の傍記異文は、④底本が「うらはみなとはの」、⑥青・⑦京・⑧静・⑨松・⑩三・⑪山本が「うらはみなとは」のである。この傍記異文に該当するのは、⑫神・⑬群の本文「みなと」である。また、400「恨むべき我が身の咎は忘られて訪はぬを憂きになすぞ悲しき」の歌末の傍記異文は、④底本が「かなしき」、⑤慶・⑥青・⑦京・⑧静・⑨松・⑩三・⑪山の諸本が「悲しき」（⑦～⑩は本行「かなしき」）であるのに対して、⑫神本が「はかなき」、⑬群本が「はかなきか」であり、④底本以下の諸本と、⑫神・⑬群の両本とが、相互の本行本文を異文として有しているのである。

以上より、④底本およびそれと同様のⅡ類本諸本の異本注記は⑫神本以下のⅢ類の本文に、Ⅲ類の⑫神本以下の異本注記は④底本以下のⅡ類本の本文に拠ったことが窺われるのである。

これに関連して、⑤慶本独自の異本注記本文について見ると、例えば、1「大伴の御津の浜松霞むなりはや日の本に春や来ぬらん」の歌末に、⑤慶本のみが「きぬらん」の傍記異文を記すが、「たつらん」を本文とするのは⑦京・⑧静・⑩三（以上「立らん」）・⑪山・⑫神・⑬群（以上「立覧」）の諸本である。しかし多くの場合、74「ときはなる松にもおなじ春風のいかに吹けばか花の散るらむ」の第三句に見える⑤慶本独自に「春風の」とする傍記異文「春風を」と一致するのが②内本と③高本の本文であるように、⑤慶本の傍記異文は②内本③高本に類する本文である可能性が高いことはほぼ疑いなくところである。なお、Ⅱ類の⑤慶・⑥青・⑦京・⑧静・⑨松・⑩三・⑪山の諸本中には、41「民安く国治まれと身ひとつに祈る心は神ぞ知るらん」の結句に、「神もしるらん」(慶)「神もしるらん」(青)、「神ぞしるらん」(京・静)「神ぞしるらん」(松)、「神かしるらん」(三・山)といった本文の対立があつて(①書・②内・③高・⑫神本は「かみそしるらん」「神ぞしるらん」、④底・⑬群本は「神ぞしるらん」、その点に見る限り、⑤慶⑥青本、⑦京・⑧静・⑨松本、⑩三・⑪山本、の三つに区別される。一方では、⑥青本から⑪山本までの六伝本は共通して、490「とにかくなほ世ぞ辛き賤しきも良きも盛りの果ての憂ければ」の結句を欠き、かつ、⑦京・⑧静・⑨松・⑩三・⑪山の五伝本は、先に記したように508の一首を態々丁替えて記し、一見当該歌を欠く形になってるのである。これらの六伝本は、一括して捉えるべきであり、中では⑥青本が、比較的優位にあると見ることができ。なおより細かく見れば、⑨松本と今井似閑本たる⑩三・⑪山の両本が近い関係にあると認められる異同(330、417、419、425、449等)が存してもいる。ところで、⑨松本には、現存本に見えない異本注記本文が存する。例えば、238「山の端の夕べの空に待ち初めて有明

までの月に馴れぬる」には「空そらに」、401「身の程を思ひ知りつつ恨みずは頼まぬ中となりぬべきかな」には「中ちゆうと」という異本注記が見えるが、この「空を」や「中の」の本文は、現存諸本には見えないものである。現存本と異なる本文による校合、一つには本集の現存本以外の伝本との校合、一つには該歌所収の他集本文との校合、がなされた可能性を僅かながら窺わせていよう。ただし、一方で、267「鳴く鹿の声聞くときの山里を紅葉踏み分け訪ふ人もがな」の結句に見える、⑨松本独自に「とふ人もかな」とする異本文「とふ人もなし」は、③高本独自の本文に同じであり、③高本の類の本文との接触の可能性も、微かに認められるのである。

なお、⑬群本は⑫神本に非常に近似するが、神宮文庫本が群書類従本の直接の親本である可能性が低いことは、例えば305「言問ひし花かと思ふうち渡す遠方人に降れる白雪」の第四句が、⑫神本が「をちかた人」であるのに対して⑬群本が「をちかたのへに」であること等の、細かな異同の様相によって明らかである。また、その⑫神・⑬群の両本は、373「思ひ侘び人にもかくと言ふべきに忍ぶる程はそれもかなはず」の結句が「それもかなはず」で、それは②内・③高本に一致するという点が存していることも注意しておいてよい。なおまた、⑭黒本は⑬群本の忠実な書写本だが、239「秋の夜の心長きは涙とて入るまで月に絞る袖かな」の第二句が、⑬群本「心なかきは」であるのに対して⑭黒本「心なりせは」等の仮名の誤読、この場合は字母「可起」の「かき」を「利勢」の「りせ」に誤読か、に起因する誤写も存している。

さて、歌頭の勅撰集入集歌を示す集付は、①書本・③高本・⑥青本・⑩三本・⑪山本以外の諸本が共有する278の「続古」の一箇所以外には、②内・③高・④底・⑤慶・⑪群本が有している。次に、列挙しておこう。

1 「続古」(内・高・底・慶・群)、4 「続古」(内・高・底・慶)、5 「続後拾」(内・底・慶・群)「続古拾本」(高)

(事實は統後拾遺)、6 「統古」(内・高・底・慶・群)、18 「新後拾」(群)、27 「新千」(内・慶) 「新古」(高) (事實は  
 新千載)、28 「統古」(内・高・底・慶)、31 「新千」(内・慶)、44 「統千」(内・底・慶)、45 「統古」(内・底)、53 「統  
 古」(内・高・慶)、61 「新後拾」(群)、67 「統古」(内・底・慶)、90 「統古」(内・慶)、96 「統古」(内・底・慶)、97  
 「統古」(底)、98 「統古」(内・底・慶)、102 「統古」(内・慶) 「統拾」(底) (事實は統拾遺)、111 「統古」(内・高・底・  
 慶)、113 「統古」(内・底・慶)、127 「統後拾」(内・底・慶)、135 「統拾」(内・底・慶)、136 「統古」(内・底)、141 「統古」  
 (内・底・慶)、154 「統古」(内・底・慶)、167 「統古」(内・底・慶)、169 「新後拾」(内・慶)、170 「統古」(内・高・慶)、  
 183 「新古」(高) (錯誤か)、184 「新千」(内・慶)、204 「統古」(内・高・底・慶)、209 「統古」(内・高)、213 「統古」(内・  
 底・慶)、224 「統古」(内・慶)、244 「統古」(内・底・慶)、272 「統古」(内・底・慶)、278 「統古」(内・底・慶・京・靜・  
 松・群・黒△二句の右傍)、284 「統古」(底)、288 「統古」(内・底・慶)、290 「統古」(内・底・慶)、296 「統古」(内・底・  
 高)、323 「統古」(内・底・慶)、327 「統古」(内・底・慶)、329 「統後拾」(底)、334 「統古」(内・底・慶)、340 「統拾」(内・  
 底・慶)、344 「統古」(内・高・底・慶)、349 「統古」(内・底・慶)、356 「統拾」(内・慶)、360 「統古」(内・底・慶)、378  
 「後拾 藤原長能」(内・慶) 「後拾」(底) (377の本歌)、392 「統古」(底)、395 「統古」(内・底・慶)、399 「新古」(底) (事  
 實は新後撰)、402 「統古」(内・底)、403 「統古」(内・底・慶)、404 「統古」(内・底・慶) (内・慶本は「同」、408 「統古」  
 (内・底・慶)、409 「新後」(底)、414 「新後」(底)、420 「統古」(内)、423 「統古」(内・底・慶)、433 「新後」(内・底・慶)、  
 435 「統古」(内・底・慶)、441 「統古」(内・底・慶・群) (統古今)、472 「統後拾」(底)、493 「統古」(内・底・慶)、495  
 「統後拾」(底)、508 「統古」(内・底・慶)。

如上の集付の様相から、多くの集付は②内・④底・⑤慶本が一致していると言える。もとより事実に基づく勅撰集の

集付は、各伝本区々に付されたとしても一致して不思議はないが、近世以前にそれを行うことが相当に困難であることも間違いないであろうから、本文自体に類似性や関連性がある伝本同士の場合、集付も相互に關係している可能性は高いであろう。中で④底本は、他本にない独自の集付も含め、一部に錯誤はあるものの、比較的には正確に付されていて、これは書写の丁寧さや歌頭の不審紙様の小紙片貼付の様子から見て、該本に真摯に向き合った何人かによって付された集付である可能性を見るべきであろうし、他本に拠つたとしても、忠実に書写されたものと見てよいであろう。また、②内本と⑤慶本のみが誤認も含めて共通している場合が散見して、両本の一致度が他本に比して高いことは、先に述べた⑤慶本の異本が②内本の類の本文であることに照らせば、⑤慶本本文が②内本の類の本文に接触したことを裏付けけるものと見てよいのではないか。③高本のそれも、他本からの書写であるとすれば②内本の類に拠つた可能性が高いであろうが、錯誤が多く杜撰さは否めない。なお、⑬群本の集付は、②内・③高・④底・⑤慶の四本とは無關係に、本文転写のいずれかの段階で付されたものと見られる。

### むすび

『瓊玉和歌集』の現存本には、数次の編纂段階を示すような、あるいは編纂時の大改訂を示すような、本文上の痕跡は認められない。しかしながら、唯一室町期にかかる書写と見られる①書陵部本と、②内閣本および③高松宮旧蔵本のⅠ類本は、編纂上の改編に起因して④底本以下のⅡ類本と⑫神宮文庫本以下のⅢ類本に先行するかと思われる異なりが認められるので、これを原撰の姿を窺わせる諸本として一括した。ただし、①書陵部本には落丁が存する上に本文書写上の欠陥と奥書の信頼性への疑義があり、かつ②内閣本と③高本宮旧蔵本にも本文の欠落が認められるので、いずれも優

良な本文とは言いがたい。

群書類従本を含むⅢ類本については、⑫神宮文庫本と⑬群書類従本は、直接の書承関係にはないが極めて近似した本文で、共通の祖本を想定しうる。⑭黒川文庫本は群書類従本の忠実な書写本である。これらは、Ⅰ類本に通う点も僅かに認められるが、Ⅰ類本ともⅡ類本とも異なる独自性も存していて、これらを一括して類別することには躊躇はないが、なお僅かながら残る配列上の他類との異なりが、編纂過程で生じたのか、書写過程で生じたのかは、そのみに見る限りでは判断がつかない。ただし、異本注記を見ると、Ⅱ類本とは対立的な関係性が窺われるのであり、後代の書写上に発生した変化ばかりではなく、ある段階で既にⅢ類本独自の本文の異なりが生じていたらしいことは認めてよいであろう。

比較的には精撰と判断されるⅡ類本はさらに、本文の有無と配列の一致および奥書の共有から、第Ⅰ種④底本・⑤慶大本と、第Ⅱ種⑥青山会本・⑦京城大本・⑧静嘉堂本・⑨松平文庫本・⑩三手文庫本・⑪山口図書館本の諸本とに、種別することができるが、⑤慶大本と⑥青山会本にも近い点があり、第Ⅱ種中では⑥青山会本が優位である。またさらに細かくは、⑦京城大本・⑧静嘉堂本・⑨松平文庫本がより近く、共に今井似閑本たる⑩三手文庫本と⑪山口図書館本は親子か兄弟等の親しい関係にあることは疑いなく、同時にそれらは⑨松平文庫本とも近い点が存している。なお、その⑨松平文庫本の異本注記に、現存本とはやや異なる類の伝本が存した可能性を僅かながら見ることができ。

結局、書写が精確丁寧であり、本文に欠脱がなく、伝来も信が置けるといふ点で、優良な本文を有して注釈等の底本とするのに堪えうるのは、Ⅱ類の④底本、即ち書陵部（五〇一・七三六）本であることは、動かしがたい結論であろう。

注

(1) 『私家集大成 第4巻 中世Ⅱ』(昭五〇・一一、明治書院)。担当は、樋口芳麻呂。「解題」に、底本とする書陵部本(五〇一・七三六)の簡要な書誌を記し、書陵部本(五五一・一八)の「正和三年」の奥書を掲げつつ「古写本だが、落丁があり、歌数は四八五首にすぎない。」とし、また、高松宮本(現歴博蔵本)の「永享八<sub>辰</sub>年」の奥書を掲げつつ「歌数は五〇四首である。」と指摘する。

(2) 『新編国歌大観 第七巻 私家集編Ⅲ』(平元・四、角川書店)。担当は、黒田彰子。「解題」に、「本集の伝本は、宗尊親王の家集の中では比較的多く、底本の他に、島原松平文庫本、静嘉堂文庫本、内閣文庫本などがあるが、いずれも底本と同一系統に属するものと思われる。他に古写本として、二条為明の奥書を有する書陵部蔵本(五五三・一八)と、永享八年の奥書を有する高松宮旧蔵本がある。この二本は、系統をわかつ程ではないが、底本以下の伝本とは多少の異同が認められる。この二本と底本を比較すると、親王の他の家集等により確認しえた範囲では、おおむね底本の本文の方が良好である。」としつつ、「明らかな誤脱・誤写はあるにせよなお古写二種は相応の価値を有するものと思われる。」と言つ。